

全四国水平社大会の開催

松山市

大正 13 (1924) 年 9 月 20 日、全四国水平社大会が松山市で開催された。愛媛県代表として、松浪彦四郎 (座長)、徳永参二 (議長)、全国水平社少女代表の増田久江、兵庫県婦人水平社代表、愛媛県水平社少女代表の三人は、集合した百余名の水平社員の中でも特に異彩を放っていた。

同日 9 時 40 分、参加者は全四国水平社と愛媛県水平社の旗を先頭に、「正義の聖戦に参加せよ」「全国 300 万の兄弟団結せよ」「佳き日、祭壇に魂を捧げよ」「叩け、鉄門は開かれん」等ののぼりを掲げ、会場の松山市寿座ことぶきざに乗り込んだ。

当時の海南新聞には、その見出しに、「自由と平等を求むる熱烈悲痛なる雄叫おたけび、盛んなりし午後の水平社大会、12 の少女も交り、人間礼讃らいさんの大獅子吼だいししく (雄弁をふるう) をなす」と報じている。愛媛新報には、全国水平社少女代表としてこの大会に参加した増田久江の演説の要旨をのせている。その要旨は、次のとおりである。

「(前略) 小さな子どもであっても被差別部落出身であるがゆえに学校でも、村でも他の子どもと同じように遊んではくれないように、子どもなどにまで差別的観念を与えなければならぬのはなぜですか。悪いことをしなくても、やはり悪い者のように排斥はいせきされているではありませんか。(中略) 私等は悪いことをしなくても、被差別部落出身であるがゆえに世の中から排斥されなければならないという事を思うと、学校へ行って立派な人間になれと聞いても本気になって聞けないのであります。日本の国民は米国において排斥されるといって憤慨がいしたり騒いだりしているが、日本の国の中において 600 万の同胞が排斥されているではありませんか。もし、日本が真に世界の一等国なら、私たちの叫ぶ水平運動にも少し理解を持ってくれそうなものではないでしょうか。皆さん、早くねむれる兄弟たちをやり起こして、この間違った世の中を立て直させる運動に加わって下さい (後略)」

その熱烈な演説は、集まった 2000 人の聴衆とうすいを陶醉させた。少女たちの悲痛なうちにも深刻な叫びが、会場を大きな渦うずに巻き込み、大会は盛会のうちに閉会した。なお、参加者の中には、西光万吉 (水平社執行委員) や、南梅吉 (水平社中央執行委員長) らの名も見られ、いずれも当日の演説会において熱弁をふるった。

[参考資料]

愛媛県人権教育協議会 『愛媛の部落解放史』

近代史文庫大阪研究会 『愛媛近代部落問題資料・上巻』



全四国水平社大会の様子
(水平社博物館蔵)